

津波避難キャスターコメントに関する考察 —津波避難経験者対象の定性的調査から—

○福本晋悟¹

¹株式会社毎日放送 総合編成局アナウンスセンター（人と防災未来センター特別研究調査員）

1. 本研究の背景と目的

東日本大震災発生時の放送局は、地震発生の数分後には災害初動特別番組に切り替え、大津波警報発表を迅速に伝えた。一例として、NHKは、アナウンサーは津波からの避難を繰り返し呼びかけ、初動の報道は手順どおり手早く対応できたとしている（NHK 放送文化研究所メディア研究部番組研究グループ 2011）。

しかし、津波による人的被害の大きさや、岩手県・宮城県・福島県では大津波警報や津波警報（以下、(大)津波警報と表記）を見聞きした人のうち17%は「避難は必要ないと思った」と回答（内閣府 2011）していることなどから、各放送局内では津波避難呼びかけ手法の改善を進め、災害初動特別番組の放送手法や放送実施マニュアルの検討・改善を進めてきた。それらの1つで、ニュースキャスターらが使用する「津波避難キャスターコメント（呼びかけ文言、後述する）」も検討・改善が行われた。

一方で、津波避難をした住民が、東日本大震災の初動番組で放送された情報をどのように受けとめて行動したのかなどについての調査は、横尾ら（2017：149-159）の研究などが確かにあるものの、震災後の新たな津波避難呼びかけ手法を、学術的にデータを集めて分析するアプローチ検証をしたものはほとんど見られない。

そこで本研究では、津波避難アナウンスメントの議論の礎となるデータを構築するため、東日本大震災で津波避難を経験した住民への定性的調査を実施した。

2. 本研究のアプローチ

津波避難キャスターコメントとは、キャスターが視聴者・リスナー（以下、住民と表記）に避難などの適切な行動を呼びかけることを目的に、放送局内で検討を重ねられた例文（集）のことであり、キャスターが放送で避難を呼びかけられる文言や文である。放送局内では、それらをまとめた冊子や予定稿を作成して、キャスターなどが緊急時にすぐに読めるようにスタジオに常置している。その理由の1つは、キャスターの経験値やスキルによって、住民に対して呼びかけられる内容にばらつきが生じることを防ぐためであり、キャスターは、気象庁の観測データなどの最新情報とキャスターコメント

を瞬時に織り交ぜ、住民に対して危険回避の行動を促す。

本研究では、2012年と2016年の津波警報発表時の放送で実際に使用されたキャスターコメントを基本とした独自の「津波避難キャスターコメント」を作成した。

大津波警報が、岩手県・宮城県・福島県に発表されました。東日本大震災クラスの巨大な津波が来ます。非常事態です。今すぐ逃げてください。今避難すべき場所は、高台や津波避難ビル、津波避難タワーなど高いところです。急いで逃げること！ただちに避難！命を守るために、ためらわずに避難をしてください。この放送を聴いたあなたが、まわりにも声をかけながら率先して避難をしてください。

これを、東日本大震災以後にNHKなどが採用している「切迫感のある強い口調」で著者が読み上げて録音した。読み尺は29秒である。この音源を複製し、2度繰り返される「津波避難サンプル音源」を作成した。

3. 調査概要と結果

(1) 対象と方法

東日本大震災で市町村別犠牲者数が最多となった宮城県石巻市で、「大津波警報を放送または防災行政無線で入手した人」かつ「地震発生時に、後に津波浸水範囲となった場所にいた人」を対象に半構造化インタビューを実施した（n=10）。選定方法は雪だるま式標本法である。

調査前に、対象者には倫理的な配慮を行なった。インタビューの冒頭では、震災発生時にいた場所や情報入手手段など、基本的な情報について尋ねている（表-1）。

表-1 調査対象者の概要

調査対象者	震災発生 当時の年齢	地震発生時 にいた場所	大津波警報 入手方法	調査実施日	インタビュー 時間
A	50歳代	職場	カーラジオ（NHK）	2018年8月22日	1時間5分
B	60歳代	職場	防災行政無線	同上	1時間19分
C	50歳代	車を運転中	カーラジオ（TBC）	2018年11月13日	1時間18分
D	60歳代	職場	防災行政無線	同上	1時間12分
E	70歳代	自宅	カーラジオ（NHK）	2018年11月14日	1時間24分
F	60歳代	自宅前	カーラジオ（局不明）	同上	1時間17分
G	50歳代	営業先	カーラジオ（局不明）	同上	1時間6分
H	60歳代	自宅	防災行政無線	2018年12月14日	1時間23分
I	60歳代	職場	防災行政無線	同上	1時間24分
J	70歳代	自宅	防災行政無線	2019年3月27日	1時間12分

その後、「津波避難サンプル音源」を聴取してもらい、「率直な感想」と「印象に残った言葉、フレーズ」を質問した。続いて、津波避難キャスターコメントの下線10パーツの分類を各設問とし、「〇〇というコメントは心に響きましたか？」と順番に評価を尋ねた。なお、音源の再生は日常の放送受信環境を想定して、全員同じラジオ付CDプレイヤーを使用した。音量は最大60.9dB、調査対象者との距離は約90cmである。

(2) 結果

設問ごとの回答内容を「ポジティブ」(肯定的)、「ネガティブ」(否定的)、「どちらでもない」に分類して傾向を分析した。10人全員がポジティブな回答をしたキャスターコメントは「東日本大震災クラスの巨大な津波が来ます」と「今すぐ逃げてください」の2つだった。以下、特徴的な結果を述べる。

a) 「東日本大震災クラスの巨大な津波が来ます」

E氏は「やはり東日本大震災クラスといえば、『あれが来るんだな』というのがピンときます」と答えるなど、10人全員がポジティブな評価をした。一方で、うち3人は、回答の際に「未経験の世代」の存在にも目を向けた。H氏は「これ以上の表現は無いんじゃないですか」としつつも、「ただ、次の時代の人は果たしてこれでいいのか分からないけどね」と東日本大震災発生時からの時間経過に注目した。B氏も同様の意見である。

【B】 そうですね。これもどこまで続けるかですね。今7~8年経って、どんどん震災を知らない子どもたちが増えているなかで、この表現でいいのかという感じはします。いつまでやるかですね。

著者) 2018年現在はどうですか？

【B】 効果的ですね。表現的には。

つまり、津波避難経験者にとっては心に響くキャスターコメントである一方、経験していない世代に内容を理解されるのかどうかを津波避難経験者自身が憂慮している点を、留意しておく必要があるだろう。

b) 「今避難すべき場所は、高台や津波避難ビル、津波避難タワーなど高いところです」

ポジティブな回答は5人で、J氏は「避難場所をきちんと伝えていたので、すごくよかったと思いました」と答えた。D氏もポジティブな回答であるが、印象に残った理由が石巻市特有の事情を表していた。

【D】 なぜかという、震災の後に避難タワーやビルができたので、それで頭に残ったんですね。もともとは全くなかったんですよ、避難ビルとかタワーは。だから震災の後にちゃんとこういう言葉を入れたんだなと思った。

震災後の取り組みがキャスターコメントに反映されていたことが、D氏のポジティブな理由であった。

一方で、ネガティブな回答も5人である。C氏は津波避難ビルやタワーは「イメージがない」と答え、H氏は、津波避難ビル・タワーのキャパシティに限りがあり混乱を招く恐れを指摘し、1番よいのは「高台に逃げてください」と答えた。これらの理由は、具体性を採用する逆効果の典型である。ローカリティを踏まえた地域版キャスターコメントの作成も検討すべきだといえよう。

4. 考察

調査では多種多様な意見を聴取したが、コメント内容に対する良し悪しの評価のみならず、具体的な提案を含めた回答を得られた。放送局内での議論では導き出せないかもしれない地域の事情と自らの経験を踏まえた意見であった。したがって、キャスターコメント改訂の際は、放送局内の議論に閉じてしまうことなく、住民と対話しながら共に検討するアプローチが重要である。

5. 課題と展望

まず、調査対象者の人数に限りがあった点を指摘しなければならない。また、年齢差や地域差などの属性の違いも重要である。他の被災地や、さらには南海トラフ地震で“未災地”とされる地域での調査も必要となる。

また、本研究ではどのような「受け止め」が起こるのかを幅広く調べるため、あえて調査対象者には「心に響く」の意味の指定を行わず、自由に主観的な回答を得る方法を採用したが、言語学や心理学、工学などの知見を踏まえた条件設定下での調査も求められる。今後も横断的・縦断的な研究を展開したいと考えている。

謝辞： 調査にご協力頂きました皆様にこの場を借りてあらためて御礼申し上げます。なお、本研究は「放送文化基金」(H29s) および「高橋信三記念放送文化振興基金」(H30s) の助成を受けて実施しました。

参考文献

内閣府(2011), 東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会第7回会合 資料1 平成23年東日本大震災における避難行動等に関する面接調査(住民)分析結果(参照年月日:2021.4.1)

<http://www.bousai.go.jp/kaigirep/chousakai/tohokukyokun/7/pdf/1.pdf>
NHK放送文化研究所メディア研究部番組研究グループ(2011), 東日本大震災発生時・テレビは何を伝えたか(参照年月日:2021.4.1)

https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/report/2011_05/20110501.pdf

横尾泰輔・矢守克也(2017), 東日本大震災の初動報道に関する当事者分析:キャスター自身による分析・調査と実践的考察, 災害情報, 15, 149-159.